

蔵書紹介

附属図書館所蔵「清原家家学書34種」

本学は明治30年の創設以来、平成9年に百周年を迎えます。記念事業として、百年史の編纂をはじめいくつかの事業が計画されています。本誌でも、これを機会に、本学がこの百年の間に収集してきた特徴ある蔵書を、随時紹介していくことになりました。ご愛読のほど、よろしくお願いします。

最初は、前号の興膳教授の巻頭記事や、展示会報告でふれられている「清原家家学書34種」を紹介します。

本館は現在39点の重要文化財を所蔵しています。この「清原家家学書34種」はその中の一点で、特殊文庫である清原文庫の中に収蔵されています。本文庫は、昭和26年より3か年にわたって、船橋清賢氏から受贈ないし購入した2,589冊の希覯本からなり、清原文献としては質量ともにわが国に誇るコレクションです。

家学とは、「ひとつの家で世代から世代へとつたえられる伝統的学問」(平凡社大百科事典)で、これを伝えて来たのが家学書です。

船橋家は、平安初期の学者、政治家で右大臣の清原夏野(782-837)から27世の子孫にあたる小納言船橋秀賢(1575-1614)を家祖としており、代々明経博士をもって経書を講じた儒家の名家です。このことは、興膳教授が前号にわかりやすく紹介されています。

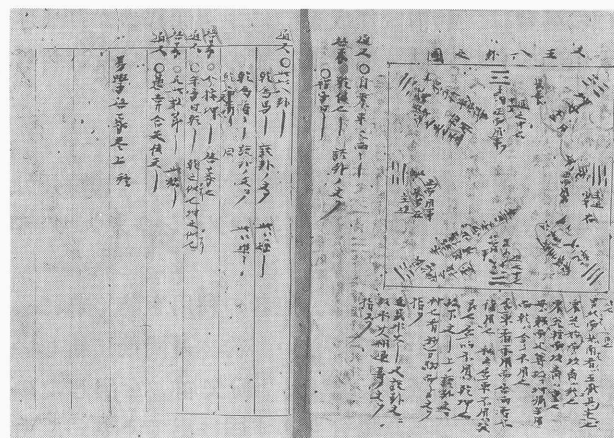
「清原家家学書34種」は昭和27年に重要文化財に指定されましたが、その内容は以下のとおりです。

御注孝経残卷、古文孝経、易学啓蒙抄、易学啓蒙通釈、易学啓蒙通釈口義、命期秘伝、尚書聴塵、毛詩、左伝聴塵、大学、論語、論語(清家証本)、論語義疏、孝経抄、史記抄、漢書抄、標題補注蒙求、六韜、六韜秘抄、司馬法、三略秘抄、三略抄、三略講義、孝子伝、長恨歌并琵琶行秘抄、拾芥抄、年中行事、新古今注、塵芥、聚分韻略、宣賢卿字書、中庸、周来疏单疏本、孝経述義

この中の多くが、興膳教授も紹介しておられる清原宣賢の自筆になるものです。清原家家学の大成者

であると同時に、室町時代を代表する経学者として知られている宣賢は、文明7年(1475)、吉田(卜部)兼俱の第3子として京都に生まれ、明経博士宗賢の猶子となり、その学統を継承しました。和漢の学に通じ、主水正、大炊頭を歴任して少納言侍従に進み、後柏原、後奈良両帝の侍読を拝しました。天文年間(1532-1555)に、越前一乗谷の朝倉氏に招かれて、孟子、日本書紀等を講じ、天文19年(1550)に、その地で客死しました。行年76才でした。

写真は、修復が完了して今年度の展示会にも出陳した、宣賢筆の「易学啓蒙抄」です。ここにいう「抄」とは、講義のためのノートを意味しています。



宣賢は、新注を参酌した祖父の業忠と同じく、宋儒の易学に傾倒しました。周易の抄物としては、足利学校出身の柏舟の「周易抄」や、五山僧桃源の「百衲襖」が著名です。いずれも「易学啓蒙」に大いに依拠し、宣賢の易学にも大きな影響を与えました。桃源は、柏舟の書をふまえて易学を集大成しましたが、業忠に「易学啓蒙」を学んでおり、清原家と密接な関わりがありました。

(雑誌・特殊資料掛)